デイダラに成り代わったようですが生きていける気がしません。

龍田

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

アニメ好きの何処にでもいる女子高生が何故かデイダラに成り代わって、死なないように頑張って自由気ままに生きていくお話。

４／１４　追記

作者の親が「受験生なんだから、ネット止めなさい」と言うので、不定期更新になると思います。

一週間に一回更新を目標にする的な事を感想欄で言ってたのにすみません。暫くは

更新出来そうにないです。誠に申し訳ありません。

目次

始まり ―― 1
公園＝戦場 ―― 4
アカデミー ―― 9
ドロマ先生のパーフェクト算数教室 14
夏のラスボス ―― 18
ガリ、参上 ―― 22
一瞬の美 ―― 27
ビッグロックは犠牲になったのだ 31
花火の思い出 ―― 36
引きこもりからの脱却 ―― 41
旅行？どちらかというと大反対です 46

始まり

転生、憑依、成り代わり。

そんなものは夢物語に過ぎない。

だってそうだろう。この世界は現在、科学技術が発達している。転生、憑依、成り代わり、そんな非科学的な事を信じるものなどほとんどいなかった。勿論、私も信じてなどいなかった。

…ついさっきまでは。

私は何時ものように朝起きて、何時ものように学校に行って部活に行って、何時ものように家に帰って、何時ものように就寝したのだ。

なのに、何故…

「産まれましたよ！元気な女の子です！」

「あぁ…私の可愛い天使…」

赤子になっているんだ？

訳がわからないよ。あの白い塊もこの状況を見たら可愛い顔してそう呟くだろう。今の私のように。目の前には金髪青目の綺麗な女性。横を見れば、少し性格が頑固そう

な糸目（？）の男性。その後ろに看護婦らしき人が数人いる。ここは病院だろうか？本当に訳がわからない。

「おぉ……！産まれたか！」

「土影様！」

しばらく頭の整理をしていると、扉の向こうから白髪の小さい〝浮いている〟お爺さんが入ってきた。魔法使いか何かでしょうか。そのお爺さんは、何やら男性とお話をしているが、浮いているという事に驚きすぎて話がまったく入ってこなかった。

だってこんなことあり得ない。非科学的すぎる。はっ！まさかワイヤーで吊っているとか…などと色々思ったが、そんなもの一つも無かった。解せぬ。

話が終わったのか、そのお爺さんは私に近づいてきて、何故か持ち上げられた。顔はどことなくＮＡＲＵＴＯに出てくる土影のオオノキ様に似ている。……ん？浮いている、土影様、オオノキ様に似ている…。あれ？この人もしかして本物の土影様？

おいおい待ってくれ。もし仮にここがＮＡＲＵＴＯの世界だとしよう。生きていける気がしないです。はい。チャクラとかどうするの、術とかどうするの、卑劣様とかどうするの。

「…して、イワキよ…。本当にワシがこの子に名前を付けていいのか？」

「はい。この子私達よりも土影様に名前を付けてもらった方が喜ぶでしょう。な、ユリ」

「ええ」
　先程まで私のことを「天使」と呼んでいた人はユリというらしい。男性はイワキ。…こういう事はあまり信じたく無かったが…転生なのか？もしそうだとしたら、このユリさんが私のお母さんで、イワキさんがお父さん…なのだろうか。地味に美男美女なのがちょっとムカつく。
「そうじゃな…。そうだ、お前の名前は『デイダラ』じゃぜ！」
　ニカッといい笑顔でそう言われる。なん…だと…？私はあの爆発君になったとでも言うのか神よ。ペインさんでも誰でもいいから答えておくれ。
　分かってはいたが、答えが帰ってくる事は無かった。

公園＝戦場

この世界に転生してから早四年。

私は新しいお父さんとお母さんの目を盗んで、少しずつチャクラの練り方や、術の基礎中の基礎と言われる分身の術をマスターしながらすくすくと成長していた。

分身の他にも、ナルトが使っていた影分身の術にも挑戦はしてみたが、やっぱりチャクラが足りないのか、半透明でぐにゃぐにゃしている私が出てきたのでやめた。

これはもう少し大きくなってから使おう。

そして、デイダラの術と言えばあの喝！だが、そんな芸術とか私興味ないですしおすし。他をあたってくだされ。

…とか思っていた時期が私にもありました。

私は一瞬の美か永遠の美かと言われたら、迷わず永遠の美を選んでいたのだが、やはり元々の体の持ち主がそれを許さなかった。

ジョジョ風に言うと、その血の運命だろう。

お陰様で私は花火とかの爆発大好き少女になっちゃったぜ。テヘペロ。

手のひらの口だが、あれは二歳くらいになってから突然表れた。

突然変異というものだろう。
あれ、おかしいなー。原作では禁術使って出てきたような…。
その口を見て、お父さんとお母さんはとても驚いていたが「それでも私達の可愛い娘だ」と、頭を優しく撫でてくれた。
次の日には口を隠すための手袋を買ってきてくれたし。
実に優しい両親である。
…その両親なのだが、イワキさんは上忍らしい。
なんでも、爆遁使いだとか。なるほど、原因はあなたでしたか。
絶対許早苗。
ユリさんは優秀な医療忍者だそうだ。
よかった、この人職業的にも見た目的にもまともそうだ。
とか思っていたのが三年前。
この人も色んな意味でヤバイ人だった。
私は土影様に「デイダラ」と名前を付けてもらったのに、今でも、私の天使～…などと訳がわからない事を言ってくるのだ。
この天使呼びはホントにやめてほしいものである。
…まぁ、そんな濃い両親ですが、こんな私を愛してくれているということは変わりな

いので、この二人は大好きです。家族愛的な意味で。
「天使ちゃん、公園にでも行きましょうか」
「いくいく!…うん」
そう言い、渡された革手袋を着け公園へ忍者ダッシュ（未完成）で向かった。
…忘れていたが、口癖もいつの間にかついていた。
・・・
公園、それは全ての子供にとって戦場である。
砂場は砂まみれ地獄が待っている。
ブランコは順番待ち地獄が待っている。
滑り台は人詰まり地獄が待っている。
なら、一番安全な場所は何処か？
…ＨＩＲＯＢＡである。
「ボールを相手のゴールにシュゥゥーーー!!」
「だにィ!?」
「超、エキサイティン!」
「赤ツチ!大丈夫かー!?ちょっとデイ姉、やり過ぎ!」
「さーせん…うん」

現在、三人でサッカーをしている。
赤ツチと黒ツチは、友達がいなくてぼっちだった私に唯一話しかけてくれた勇気ある者達だ。
そんな二人と出会ってもう一年…。
二人は、私が年上と分かってから「デイ姉」と呼ぶようになった。
今まで通りデイダラでよかったのに…。
「うわ、ヤベ。赤ツチ足怪我しちゃった系？うん」
「デイ姉の蹴りが強すぎるんだにぃ…」
「おいデイ姉、どうすんだよ！」
あいかわらず口が悪いこって。
ということで、こういう時はお母さんを呼びましょう。
せーのっ
「お母さーん！ヘルーープ!!」
「はいはい、治してほしいのね？」
「うん。赤ツチが怪我しちゃったんだ」
ベンチに座っていたお母さん、ユリさんに精一杯のＳＯＳを送る。
さすがは医療忍者。赤ツチの怪我がみるみる内に治っていく。これで元気いっぱい

赤ツチマンだ。
「ありがとうございますだに！」
「ありがとな！デイ姉のお母さん」
「いーえ、怪我には気を付けて遊ぶのよ？」
「「はーい！」」
　そうして、またベンチに戻っていくお母さん。マジ感謝。
「よっしゃ！赤ツチの怪我も治ったし、サッカーの続きしようぜ」
「エターナルブリザード打ってやるから覚悟しとけよ。うん」
「勘弁してほしいだに…」
　これが、私の日常です。

アカデミー

全てはここから始まった。

「天使ちゃん、アカデミーに行ってみない？」

「は？」

・・・

…この世界での学校は、基本、忍者アカデミーと呼ばれている。

アカデミーは六年まであり、四年間義務教育を受け、あとの二年は忍術などに関してを徹底的に行う。

術の授業は非常に楽しそうではあるが、今の私は一年生だ。そんな授業は滅多にない。

あるのは、前世で言う小学生問題ばかりで、つまらないの一言につきる。こんなんならお母さんと一緒に粘土遊びした方がいい。

しかも、前世のお陰で問題の解き方を教わらなくても分かっちゃってるので、授業の時寝ていてもテストではいつも満点で学年トップという、まさに「俺、頭ＥＥＥＥＥＥ!!!」的な事になっているのだ。

そして今はドロマ先生による数学のお勉強。
実にめんどくさいでござる。
「センセー、授業がつまらなすぎるんで粘土で遊んでいいですか?…うん」
「駄目だ」
「あ、アタイもする!」
「おい黒ツチ、お前まで遊ぶな」
今日も黒ツチと組んで楽しく授業妨害。
このドロマ先生はとってもいい先生だ。
一見、眼鏡をかけて表情をあまり崩さずいつも真面目そうな顔をしているが、実は意外とノリがいい先生なのである。
この前だって、授業の間にある休み時間に黒ツチと赤ツチを連れてダンソンをしていたら、先生が普通にその行動について笑ってツッコんでくれた。いい先生や。
「あーもう、デイダラ! 罰として黒板に書いてある問題全部解け!」
「働きたくないでござる。…うん」
「いいからやれ」
強制的に前に出されチョークを持たされる。
え、なに?これを全部解けと?

はんっ…かけ算とか、簡単過ぎて涙が出るぜ。
前世はけっこう有名な高校行ってたんだからね！女子高生嘗めんな。
全２０問の答えを次々と書いていく。それと同時に、先生の顔もだんだんと驚きの顔に変わっていった。
「…はい、ドロマ先生。これでいいっすか？…うん」
「…ぜ、全問正解だ」
その瞬間、クラスにどっと歓声がわいた。
「スゲー！」
「さすが学年トップ」
「結婚してくれ！」
おい誰だ最後の。
ふぁ～…と、あくびをしながら自分の席に座る。
すると、隣の席の黒ツチが勢いよく質問してきた。
「な、なぁデイ姉！あの問題どうやって解いたんだ!?」
「んあ？そうだなぁ…かけ算はだいたい暗記しとけばなんとかなる、うん。例えば九の段だったら、九一が九、九二　十八、九三　二十七…」
「あ、ごめん分かんない」

あっさり断念された。
でも黒ツチ、これ覚えておけばいつか役に立つよ？いつか。
さて、しっかり働いたから寝てもいいよな。
粘土を片付けて、はいおやすみ。
「それでは、授業を再開する。…って、デイダラ！寝るな！」
「ドロマ先生ー。黒ツチも寝てるだに」
「…もういいや」
勝った。
・・・
「まったく…デイダラには困ったもんじゃぜ…」
はぁ…と、もう何度目か分からない溜め息をつく。
いったいあの時の可愛さは何処へ行ったのか、デイダラはまれに見る問題児と化していた。
しかし、問題児と言っても勉強の方ではない。デイダラは学問においては成績優秀、毎回テストで満点をとり学年トップを取っていて、その成績は天才の部類に入る。
問題なのは授業態度だ。
今日だって、報告書に書いてある事が本当だとすれば、授業中に何処からか粘土を取

り出して遊んでいたとか。授業が終わってからその粘土を没収したようだが、その形はまさに、ドロマ先生いわく芸術だったらしい。

…もしかしたらそっち関係でも天才かもしれんな。

って、こんなこと考えている場合じゃない。報告書には、ワシの孫娘である黒ツチもデイダラと一緒に色々やっているそうじゃないか！

これはさすがに見過ごせん。

この後すぐに黒ツチを呼び出さねば、じゃぜ！

「おーい、黒ツチ！ちょっと来い！」

ドロマ先生のパーフェクト算数教室

今年も将来有望な元気いっぱいの子供達がアカデミーへと入ってきた。入学式も終わり、今は新しい教室で教頭先生に説明を受けているはずだ。

どんな子達なのかを見に行ったところ、色々な個性を持った子供の中に、一人だけ気になる少女がいた。

金髪で淡い青色の眼をしており、見た目は完全に子供だが何処か大人っぽいオーラが漂っている。他の緊張してガチガチになっている子や、ダジャレを言って教室に冷たい空気を漂わせている子達と比べると、その少女だけ何かが違う気がした。そう、例えるなら「見た目は子供、頭脳は大人」が一番ふさわしいだろうか。

なんだかその子が気になって、しばらくの間少女を観察（ストーカーではない）していると、教頭先生によるアカデミー説明会が終わり、机に座っていた子供達の元に保護者がだんだんと集まってきた。その保護者達に紛れて土影様も混ざっているが、土影様も孫を見にきただけだ、気にしないでおこう。さすがに大事なプライベートまで邪魔されたくはないだろうし。

気になるのはあの子供だ！彼女の親を見れば、何故あんな不思議なオーラを持ってい

るかが少しくらいは分かるかもしれない。もしかしたら遺伝という可能性もある。そんな、他の人が聞いたら凄くどうでもいいであろう好奇心をウキウキさせながら先程少女がいた方を見る。

そこには、顔はよく見えないが、少し頑固そうな黒髪の男の人と、子供と同じく金髪青目の美しい女性がいた。恐らくあの二人が少女の両親であろう。何やら女性が少女に大きめの箱を渡している、入学祝のプレゼントだろうか。何とも優しい両親だ。

どんな両親なのか気になって、顔が見える程度に少しさりげなく近づく。顔を確認すると、思わずなるほどと思った。

なんと、少女の父は上忍のイワキさんだったのだ。イワキさんは血継限界の爆遁使いで、あの有名なガリさんの弟でもあり、とても信頼が高い人である。しかも横にいる女性、あの人はユリさんだ。イワキさんと違って血継限界はないが、医療忍術に関してはものすごい才能を持つ忍である。

まさかあの少女が二人の娘だったとは…。何か雰囲気が違うのも頷ける。とにかく色々とあったのだろう。

…もしかしたらあの二人の子供さんに自分が勉強を教えられるかもしれない。そう思うと胸が踊った。イワキさんとユリさんは、自分が最も尊敬している人達だ。嬉しくない訳がない。

それに、きっとイワキさんの血継限界とユリさんの頭の良さは受け継いでいるはず。戦闘も学問も問題ないだろう。少し早い気がするが、将来が楽しみである。

少女が自分のクラスになってくれる事を願いながら、女房が待っている家へ帰宅した。

後から名簿を確認したのだが、少女の名前はデイダラというらしい。

翌日、自分が担任するクラスが決まった。

教室に入ると、昨日の少女…デイダラが静かに椅子に座っているのを見て嬉しかった。イワキさん、ユリさん。俺はデイダラを絶対に優秀な忍にしてみせます。多分家にいるであろう二人にそう誓った。

…数分後、デイダラの横に座っている土影様の孫娘様に驚いたのは内緒である。

このクラスの担任をして半年。もう心が挫けそうだ。

あの時の自分に言ってやりたい。「戦闘も学問も確かに問題ないだろうが、態度は良いと言っていない」、と。

今は数学の授業をやっているのだが、いったい何処から取り出したのか、デイダラと黒ツチが粘土遊びをしている。お前らそんな性格だったか?先生の記憶にはそんなものありません。

これは何か罰をした方がいいか…。

そうだ、今黒板に書いている問題を全て解かしてやろう。学年トップのその頭脳なら解けるはずだ、さぁ頑張れ！

…しばらくして、デイダラは２０問もある問題を数分で解いた。

毎回色んな事で驚かされる。今回のもそうだが、授業中に紙飛行機を作ったり、粘土でイワキさんとユリさんを作っていたり、トランプタワーを一生懸命作っていたり…。その一生懸命さをもっと他のことに活かしてほしかったりする。イワキさん達の教育はどうなっているんだ。

その後、授業を再開したがデイダラと黒ツチが寝たので、また授業はストップした。

無視するか起こすかまで考えて、俺は考えるのを止めた。

夏のラスボス

夏、それは恐らく全アカデミー生徒が今か今かと待ち望んでいる季節であろう。

ある者は虫取網を片手に蝉を追いかけ、ある者は浮き輪を装着し海水浴へ、またある者はクーラー全快で自分の部屋にて引きこもり生活などの夢の季節が両腕を思いっきり広げて待っている。そんな夢の季節も、もうすぐここ…岩隠れにもやって来る頃だ。

通知表という悪魔からのプレゼントと共に。

「えー、約半年間よく頑張ったな。明日からは待ちに待った夏休みだ」

通知表を配られ、沈んでいた皆の顔が一瞬にしていい笑顔になる。うん、去年よりは輝いている。…去年という言葉を聞いて、頭の上に？マークを出した人がいるかもしれないので一応説明しておく。

私、デイダラは二年生になった。それは黒ツチと赤ツチも同じで、一緒に頑張って進級したのだ。一年生の頃は、前世でいう小学三年生までの授業を受け、二年生になってからは四～六年生レベルの勉強をさせられている。七才児に分数のわり算を解けと申すか。平成の世を生きている子供達に見せてやりたい。多分発狂する。

勉強のレベルが上がっているとなれば、夏休み最大のラスボス、宿題のレベルも相当

上がっているだろう。だが、高校生の頭脳を持っている私には関係無い。全ての宿題を一週間以内に終わらせられる自信がある。

卑怯？ちょっと何言ってるか分かりませんね。

「夏休みと言っても、遊ぶだけじゃ駄目だからな？喜べ、宿題を大量に用意してやったぞ」

「「えー!!」」

クラスにブーイングの声が響く。ドロマ先生の手には、先生の言った通り大量のプリントが握られていた。

「えーい、やかましい！それ以上ブーブー言ったらこの宿題を二倍に増やしちまうぞー！」

ブーブー言っていた人が一気に静かになる。こういうところだけ団結力が良いんだよなこのクラス。

「そうだ、それでいい。それじゃあ配るぞー」

宿題であるプリントの束が後ろの席へ次々と回されていく。私は一番後ろの席なので、自分の分のプリントしか渡されなかった。当たり前か。

パラパラとめくって見ると、小学生内容の問題がズラリ。これなら余裕のよっちゃんイカだ。

ふと、隣の黒ツチと赤ツチを見ると、二人共プリントと睨みあって呻き声をあげてい

る。今度勉強会でも開いてやろう。
「それでは、今日はもう終わり！始業式にて待っているぞ！」
「「ありがとうございました！」」
バッと扉へ駆け出す者達を見て、少し笑みがこぼれる。どんだけ家に帰りたいんだ君達は。
帰る準備をしていると、黒ツチが何やらプリントを持って私の方をチラチラ見てくる。勉強でも教えてほしいのだろうか。粘土造りも大歓迎だがな。
「…黒ツチ、どうしたんだ？…うん」
「へ!?ぁ、いや…あのだな…」
「勉強を教えてほしいみたいだに」
「お、おい赤ツチ!?」
私の予想はどうやら当たっていたようだ。
赤ツチに八つ当たりしようとしている黒ツチをとりあえず止める。殴りかかっていたんでな。
「そういうことなら、今日私の家に来るか？お父さんとお母さんが任務で居なくて…少し寂しかったとこなんだ。うん」
そう言うと、黒ツチの顔がキラキラと輝く。赤ツチが「良かっただにな」とか言って

るけど、赤ツチ、お前も強制だぞ。
「…行く！絶対行く!!」
「そうと決まったら早速行こうか…うん。おい、赤ツチ置いてくぞ！」
「だにぃ～！」
　その後、皆で楽しく勉強した。

ガリ、参上

黒ツチ達と勉強会をしてから一週間。

言っていた通り宿題は全て終わらせた。アカデミーの子供達にとって、最低最悪最大の敵『宿題』を無事に倒すことが出来たのだ。今の私は喜びという感情に入り浸っている。

例えるのならば、ＦＦやドラクエをクリアした時のあの感動に似ている。とにかく嬉しい限りだ。これで夏休みは存分に遊べるだろう。勿論、修業も欠かさないが。

自分の部屋でゆっくり寝ていると、窓にリュックを背負った鷹がとまる。確かこの鳥はお父さんが連絡に使っている口寄せ動物だったはずだ。名前は…なんだっけ、三日月だったか。由来は額に三日月形の模様があるから、らしい。何とも単純な名前の付け方だ。

「キー！」

「あぁ、ごめんごめん。すぐ取るから少し待ってくれ…うん」

三日月がナルトスなどで犠牲になった何処かの鷹のように鳴く。

リュックの中身を確認すると、少し分厚い封筒が一つ。それを取ると三日月は仕事が

終わったと言うばかりにすぐ飛びさってしまった。
勉強机の椅子にドカッと座る。お父さんとお母さんは大丈夫だろうか。もう十日は任務に行ったままで、怪我してないか心配である。…医療忍者であるお母さんがいるので心配無いと思うが、やはり大事な人を心配してしまうのは人間の特徴と言えるだろう。
「はてさて、何が入っているのやら…うん」
ハサミで封筒の上の部分を切り、中身を机にぶちまける。少々荒いとは自分でも思うが、この方が手っ取り早いのだ。綺麗に取り出す時間があったら他の事に時間を活かせと私は思う。
でだ、入っていたのは一通の手紙と大量のお金。多分お金は生活費に使えという意味だろう。半分は食費で後の半分は粘土を買おうそうしよう。お金と共に入っていた手紙を見てみると、このような事が書かれていた。
『デイダラへ
元気にしているか？俺は…自分で言うことではないが、母さんと一緒に任務で活躍しているぞ。
ご飯はちゃんと食べているか？お前の事だから、きっと新しい粘土を買ってばかりだろうな。リビングにはお前の作品がまた増えているんだろう。楽しみだ。

…さて、本題に入るぞ。実は、八日に俺の兄、ガリが九年ぶりに家に帰ってくるんだ。兄さんはすごい爆遁使いでな。次はいつ帰ってくるか分からないから、色々と修業をつけてもらうといい。兄さんにこの事はもう頼んでるから後はよろしく。

父さん達はあと二週間後くらいに帰るぞ！

イワキ・ユリより』

「ふぅ…」

読みおわって、何故かため息が無意識に出てきた。二人が帰ってきたら聞きたい事がたくさんある。兄がいるとか今まで知らなかったぞ、父よ。そしてそれを何故教えてくれなかったんだ、母や。

とにかく、手紙には八日にガリさんが来ると書いてある。そして今日は七日。明日じゃねぇか。

「…忍具一式とか揃えた方がいいのか？…うん」

幸せ気分だったというのに、一瞬にして不安に押し潰されそうになってしまった。

・・・

コンコン

八日の朝早くにノックの音が響く。私はまだ寝ていたので部屋は静かだ。そのせいでいつもよりノックの音がよく聴こえる。

コンコン
「はいはーい…」
のそのそと自分の体温でほのかに温かくなった布団から出る。夏といっても朝は少し肌寒い。ハンガーにかけてある黄緑色のパーカーを羽織る。ノックしているのは恐らく、昨日手紙に書いてあったガリさんだと思う。にしても、ちと早すぎやしないか？時計ではまだ午前五時なのだが。なかなかの睡眠妨害である。
コンコン
「今開けますよー…うん」
ガチャリ、と玄関の扉を開ける。そこには、１７０ｃｍはあるであろう、黒髪ツンツンの男の人が立っていた。…地味に某ヘタレ王子の髪型に似ている。
「…お、君がデイダラか？」
「…そうだけど。誰だアンタ、うん」
ガリ？さんが膝を折って私と目線を合わせる。何だか子供扱い（実際子供だ）されているみたいで少しきつい言い方になってしまったが、ガリ？さんは優しく答えてくれた。
「あぁ…すまないね。俺はガリ、君のお父さんイワキの兄だ。手紙に書いてなかったか？」

「…あなたがガリさんでしたか」
「俺は君に修業をつけてほしいとイワキに頼まれてね。暫く住み込みで居させてもらうから、よろしく」
「は？え、うん!?」
そう言うなり、ずかずかと家の中に入っていくガリさん。
ちょ、部屋まだ汚いんですがそれでいいんですか？というかお父さん、住み込みとかどう言うことだ。
帰ってきたら問い詰めなければ、ともう一度決心するデイダラであった。

一瞬の美

ピピピッピピピッ
「う…うーん…」
ピピピッピピピピピピ
「…るせぇ!」
ガッと目覚まし時計に殆ど八つ当たりのチョップをかます。現在朝の六時半、あの時から一時間ちょいしか眠れていない。
ガリさんはあの後、勝手に家に押し入り、勝手にお父さんの部屋のベッドに倒れこみ、そのまま就寝した。よっぽど疲れていたのだろうが、何もかも勝手にしないでほしい。あと、外にいたんだから服についている砂くらいは落としてほしかった。
「はぁ…」
今更そんなこと考えても仕方がない。思い体を無理矢理起こしてパジャマから私服に着替える。オレンジのボーダー柄の服に、ベージュの短パン。何事も動きやすいのが一番いい。たまに黒ツチから「スカートもはいてみろ」と言われたりするが、あまり気が進まない。というかスカートを持っていない。今度お母さんに買ってきてもらうか。

洗面所へ行き、顔を洗って歯磨きをしてからリビングに移動する。今日はガリさんがいるので二人分の朝食を用意しなければいけない。確か卵が大量にあったはずだ。目玉焼きと食パンにしよう。

数分後、意外に上手く作れた。久し振りに目玉焼きを作ったが、形も崩れていないしある意味芸術と言えるだろう。いやー私って天才。焼けた食パンの上にレタスを乗せ、またその上に先程作った目玉焼きを乗せる。これで朝食は完成だ。机にそれを並べ、コップには冷蔵庫のお陰でキンキンに冷えた牛乳をそそぐ。あとはガリさんを呼んでくるだけだ。

「ガリさん。朝ご飯出来ましたよ。起きてください！…うん」

ガリさんが寝ている部屋に移動しながらそう呼びかける…が、返事は返ってこない。まだ寝ているのか？早く起こさないとパンが冷めてしまう。

「ガリさん？ガリガリさーん！」

ちょっとしたいたずら心で名前を変えてみる。

…あ、なんかあの有名なガーリガリ君アイスに似てるな。

ガチャ

「へ？」

突然ドアが開く。驚いて少し反応が遅れてしまったが、目の前にはガリガリ…げふん

げふん、ガリさんが目の前に立っていた。だが、まだ眠いのかフラフラしている。
「…あれ、デイダラじゃないか。もしかして起こしに来てくれたのかい？」
「う、うん」
「そうか…ありがとな」
　わしゃわしゃと頭を撫でられる。嬉しかったが、そのせいで髪が跳ねまくってしまった。さっき綺麗にしたばっかりなのに…後でまたクシでとかなければ。
「ガリさん、もうご飯出来てますから早く食べちゃいましょ。…うん」
「おお！凄いなデイダラは。まだ小さいのに」
「一言余計です」
　とにかく自分のお腹も空いたので、ガリさんの手を引っ張って急いで移動した。

・・・

　ご飯を食べてる途中、ガリさんが私がもっている血継限界の事について色々話してくれた。どうやら私にも爆遁が使えるようで、お父さんからその使い方を教えてやってほしいと頼まれたらしい。マジすか。
「ガリさん、その爆遁ってどういう風に使うんですか？…うん」
「ん？そうだな…。説明するより見た方が早いか。今何か壊していい物はあるかい？」
「…粘土ならありますけど」

いつも持ち歩いている粘土を渡す。ガリさんはありがとうと言ってから粘土を受け取った。爆遁と言うだけあって、けっこう危ないらしいのでご飯を台所へ片付ける。
「デイダラ、よく見ておきな」
ガリさんが手をぐーにして粘土に触れる。その瞬間、粘土が内側から勢いよく爆発した。粘土の破片が部屋に散らばる。
「どうだ?爆遁は拳で触れたものを内側から爆発させる事が出来るんだ」
「…」
「あれ…デイダラ?」
「…芸術だ」
やっぱり芸術は爆発だ。儚く散りゆく一瞬の美!手にある口を使って芸術を造り出すのもいいが、まさか血継限界でも芸術を極めれるなんて…!
「ガリさん!も、もう一回やって!!うん!」
「え!?いや、これからデイダラもこれ出来るようになると思うから自分で…」
「もう一回、もう一回」
「手拍子入れながら言うの止めようか」
その後も、暫くこのやり取りが続いたのであった。

ビッグロックは犠牲になったのだ

突然だが、ここは演習場。

そして目の前には五メートル程の高さがある岩。

「デイダラ、教えた通りにやってみて」

「はい！」

ガリさんに説明された通り拳を岩にくっ付ける。ここからはひたすらに集中だ。もし失敗したら岩ではなく自分の腕を爆発させてしまう可能性があるからである。拳にチャクラを集めるイメージをする。大丈夫だ、ゆっくりでいい。成功することだけを考えろ。そう自分に言い聞かせる。

「くっ…」

どうやら集中しすぎて拳にチャクラを込めすぎたようだ。手が痛い。確かこう言うときはチャクラを一度戻した方がいいとガリさんは言っていた。一度チャクラを込めるのを止めて、またチャクラを込める。

…長い時間が経った気がする。いや、もしかしたら一、二分しか経っていないかもしれない。とにかく、拳に集めたチャクラはもう充分だろう。一気にチャクラを外に放出

するようにイメージする。そう、まさに爆発するような。

「はっ！」

ボンッ!!

岩の内側から爆発が起きる。岩は大きな音をたてて崩れたが、まだまだデイちゃん特製起爆粘土よりも爆発の威力は小さい。もっと大きめの爆発だったら素晴らしい芸術と言えるだろう。

「…凄いな。たったの一日でここまで出来るとは…天才という噂は本当だったのか…」

「ガリさん。次の指示は…？うん」

「！あ、あぁ…すまない。じゃあ次は中くらいの十メートルの岩を壊してみてくれ」

「はい。…ってデカ！」

その岩にさっきと同じように拳を当て、爆発させる。しかし、岩には小さな亀裂しか入らなかった。なにこれ硬い。

その後、何回も何回も爆発させたのだが、本当に小さい一ミリくらいの亀裂しかこいつは受け入れないようだ。そうかそうか、そこまで美しい芸術になりたくないというのか。ならばお前を芸術に変えるまでニックネームで呼んでやろうこの『ビッグロック』め！そのまんまだけどお前にはお似合いだコノヤロー！うおー覚悟しろー！

・・・

ガリさんが爆遁の修業をつけてくれる様になって二週間。
私の爆遁は実戦でも充分活躍出来るほどになっていた。今までずっと苦戦していたあのビッグロックも簡単に壊せるようになったのだ。その次に現れた野生のビッグロック2もビッグロック3も全部「必殺…火竜の鉄拳！」で一瞬の美へと変わっていった。実に美しい。お前はいい奴だったよ。
「…もう二週間か」
「早いですねー…うん」
座っているガリさんが時間ってはえー！的な事を言って水筒の水を飲む。私もちょうど休憩中だったので、隣に座って一緒に水を飲む。うまし。
「天……ちゃ…！」
「うん？」
何だかとっても聞き覚えのある声が聴こえて咄嗟に後ろを振り返る。
…あれ？気のせい？
「？どうしたんだいデイダラ」
「いや…やっぱ気のせ…」
「天使ちゃーん！」
「ごめん気のせいじゃ無かった。うん」

今度ははっきり聴こえたお母さんの声。いつの間に帰ってきていたんだろう。帰ってくるんなら娘に一通の手紙くらい送ってくれ。
「天使ちゃん、元気だった？粘土食べちゃったりしてない？」
「してないよ!?うん！」
お母さんが抱きつきながら絶対に私がしなさそうな事を聞いてくる。その後ろからひょっこり現れるお父さん。久し振りのガリさんとの再会であまり笑わないお父さんが微笑んでいる。笑わないのにあの手紙のテンション…なにこのギャップ。
そのままお母さんに抱きつかれていると、お父さんとガリさんが近づいてきた。あ、こう見ると似てるわこの二人。お父さんの髪形はサイヤ人じゃないけどね！
「デイダラ、兄さんに聞いたんだが…もう爆遁を完璧に使いこなせるって本当か？」
「…完璧にって程じゃ無いだろうけど…まぁ少しは、うん」
「ちょっと父さんに見せてくれないか？」
「え」
「あ！それ私も見たいわ。天使ちゃん、お願いできる？」
「え」
もう私は何も言うまい。そんなにニコニコな笑顔で言われて断れる訳がないだろう？くそう何て卑怯な…。とにかくコクりと頷いてからビッグロックの前に立つ。すま

ないビッグロック、私の為に犠牲になってくれ。私の拳が岩に触れる。その瞬間、凄まじい爆発と共にビッグロックは芸術となった。お前の事は忘れない。
「凄いじゃないかデイダラ。流石俺達の子だ」
　そう言って頭を撫でてくるお父さん。やはり兄弟か。ガリさんの撫で方と全く同じと言っていいほど似てやがる。
「天使ちゃん凄いわ！かっこよかったわよ～」
「ちょっとお母さん…いきなり抱きつくのは止めて？うん」
　え～、とお母さんは言っているが、けっこうキツイんです。分かってくださいお願いします。そんな光景を見てガリさんは何を思ったのか、
「…俺も早く結婚しないと」
「ガリさん!?」
　真面目な顔でそう呟いていた。

花火の思い出

「デイ姉ー！あれ、あれ取って！」
「は!?射的とか苦手だってさっき言ったろうが!!うん！」
「デイ姉、イカ焼き買うからあと十両…」
「土影のじいちゃんから貰え、うん」
「あ、この綿菓子美味しそうだな…」
「デイ姉！そんなもんより射的をするお金を…」
「失礼だなお前!?」
　…この会話を聞いて、今どういう状況なのか予想出来た人は少ないと思う。今日は夏休み最終日、夏祭りの日なのだ。ガリさんの修業を終え、ぐーたらしていた私は黒ツチと赤ツチに誘われ、皆で遊びに来たのだ。そこまでは良かったのだが、まさかの二人のお小遣いが足りなくなるというハプニング。私のお金がどんどん無くなっていく。夏祭りという名のブラックホールに吸い込まれていく。
「うっげー…もうお金が五両しかない…。たこ焼きも買えない…」

「デイ姉ドンマーイ」
「ドンマーイ」
「ドンマーイ、じゃねぇよ!!うん！」
　そう怒鳴ったらすぐさま顔をぷいっと横に向ける黒ツチと赤ツチ。こいつら忍の『三禁』余裕で破ってやがる。自来也様の言う通り、金の魔力ってのは恐ろしいな…ホントに。
「はぁ…とりあえず土影邸に帰るぞ。この後花火だろ？うん」
「あ！そうだった、すっかり忘れてたよ！」
「普通忘れるだにか…？」
　何故土影邸に行くか、確かに花火を土影のじいちゃんと一緒に見るのも理由にあるが、私のなかでの一番の理由はお父さんとお母さんが待っているからである。
　私が黒ツチと赤ツチと一緒によく遊んでいるのを見た土影のじいちゃんが、たまに土影邸に私の両親を呼ぶようになったのだ。勿論、任務とかで呼ぶんじゃなく、子供達の話やら世間話の為に。それでいいのか土影。仕事はどうした。
「よっしゃー！しゅっぱーつ!!」
「だにぃー！」
「…うーん」

…あ、ドラ○もんカステラ買えるじゃん。

・・・

私達が土影邸につく頃には、もう既に花火大会は始まっていた。待ってくれていたお父さんとお母さんには申し訳なかったが、「余り気にするな」とお父さんに言われたので余り気にしない事にした。言われるがままじゃないかと自分でも思った。まぁそれも過ぎた事。これも気にしない。

「天使ちゃん、ほら見て?あんなに大きな花火が…」

「うん…綺麗」

出来ればここで「芸術は爆発だぜヒャッハー!」とか色々皆に聞こえるように大声で叫びたいが、大事な二人に引かれた目で見られたくはないのでここは我慢する。今はお母さんの膝の上にいるのだ、お母さんに迷惑はかけたくない。…にしても恥ずかしいなこれ。子供でよかった。精神年齢は大変な事になってるけど。

「あー!デイ姉顔真っ赤ー!」

「はァ!?ち、違うし!花火のせいだし、うん!」

「?今赤色の花火は出てないだによ?」

「…」

赤ツチよ、マジレスをするんじゃない。これは照れ隠しって言うんだぜ？

「これ、黒ツチ。デイダラをあまり茶化すでない」

「じいちゃん…」

黒ツチの後ろから土影のじいちゃん登場。その横にはお父さんがついている。やはりお爺ちゃんの威力は絶大か。あの黒ツチをたったの一回で静かにさせるとは…。ドロマ先生にも見習ってほしいな、無理と思うけどね。

「あら、土影様。もう花火は始まっていますよ？」

「ユリ…お主は呑気でいいな…」

はぁ…と溜め息をつく土影のじいちゃん。溜め息をつきすぎたら幸せが逃げるのを知っているのだろうか。そんなことを私が思っているのも露知らず、じいちゃんはまた大きな溜め息をついた。

「土影のじいちゃん大丈夫か？さっきから溜め息ばっかりついてるけど…うん。幸せが避雷針の術使って逃げるぜ？」

「いやなに、少しな…。まぁ理由はほぼ黒ツチのせいじゃがな」

「アタイ!?」

「お前しかおらんじゃろ！やった小遣い綺麗さっぱり全部使いおって!!」

…うん、これはフォロー出来ないわ。だってその被害者私だもん。しょうがないね。皆苦笑いだよ。
「お、デイダラ…あれ」
「うん？」
お父さんが微笑みながら私を呼ぶ。お父さんの指指している方向を見ると、ちょうど大きな花火が夜空に咲いているところだった。主に赤を使っている花火で、その他にも黄色やオレンジがキラキラと見える。これ作った人凄いな。
「綺麗ねー…。ね？天使ちゃん」
「うん」
私はその花火に見とれて、それしか感想を言えなかったが、二人が笑っているのは確認出来た。隣にいる黒ツチ赤ツチも花火を見て目を輝かしている。
「お母さん」
「ん？」
「芸術だね」
「…ふふっそうね」
今年の夏祭り、花火大会は私の大事な思い出となった。

引きこもりからの脱却

アカデミー三年生。この年から授業は義務教育が少なくなり、体力作りを時間一杯まで永遠にする授業が多くなる。走って走って走って、とにかく運動場を走り回るのだ。だが、それだけじゃ皆すぐに飽きてしまうだろう、と言うことで、ドロマ先生による鬼ごっこもあったり無かったり。毎回これだったらいいのに。

とか思ってたら体力がいつの間にか凄くついていた。一時間全力で走っても息切れが二、三回あるだけ。こんなこと前世ではあり得なかった。やっぱり前の世界とＮＡＲＵＴＯの世界では身体の作りが違うらしい。そうじゃないと恐ろしくなる。色んな意味で。

…まぁ私の三年生ライフはそんな特に何もない感じだった。夏祭りも雨で中止、花火も無し、結局何もなかった。

まぁそんな話は時空の彼方に投げ飛ばし、今日は日曜日…つまりは休みだ。忍にとっても忍見習いにとっても休みというのはとても嬉しいものである。何時もの私なら迷いなく部屋に引き込もって新たな芸術を見つける為に粘土をコネコネしているのだが、

何故か今日に限って甘い物が食べたくなって外に出てきた。あのニートまがいな私が自分から食べ物を買うために外出したのだ。ここで知り合いにでも会ったら「…熱でもあるんじゃないのか?」とでも言われそうだ。…想像がついてしまう自分が恨めしい。

「…あ、着いた」

ほぼ無意識で歩いていたら目の前に甘味屋が。今はおやつの時間三時。人も結構賑わっている。で、このままぼーっと店の前に立ち止まっている訳にもいかない。大きく〝和〟と書いてあるのれんをくぐる。店に入ると定員の皆様から「いらっしゃいませー」という定番の声が聴こえてきた。今日も頑張ってるな店員さん。おい店長、あのお姉さんの給料だけ上げてやれよ。男の人は百円くらいでいいから。ってことを心の中で言いつつ、ケースに置いてある和菓子達をしゃがんでどれがいいかと選ぶ。ふむ、団子がいいか大福がいいか…。羊羹もあるが私はあまり好まない。あの大人の味みたいなのが苦手なのだ。今日はあまーい物が食べたくてわざわざ外に出たんだろう?だったら甘いもん食べろよ!デイダラ!

「すいません。この苺大福ってのを一つ」

「苺大福を一つ…ですね。店内でお食事されますか?」

「うん」

「かしこまりました。少々お待ちください」

そう言って奥へと消えていった店員さん（男）。大方お皿を取りに行ったんだろう。空いている席に座って苺大福が来るのを待つ。数分じっとしていたらさっきの店員さん（男）が来て綺麗なお皿に乗せられている苺大福を置いて行く。できればお姉さんが良かったなと思っちゃったり。

出された苺大福を一口食べる。あ、美味しい。これだよ私が求めていた食べ物は。一緒についてきたお茶を飲む。まったく…最高だぜ。

「…ん？あ、お前っデイダラか!?」

「え？あぁ本当だ」

「あ？」

至福の時間を邪魔されて少しイラッとしたが、大声を出した人を見ると、その怒りもちょっとだけ消え失せた。私の名前を読んだ二人組の一人はイッタンさん。私より五歳上の先輩である。一昨年下忍になったらしいが、未だに中忍にはなれていない五月蝿い人だ。だからこの人に敬語は使わない。だって五月蝿いもん。

「珍しいな…引きこもりのデイダラと下忍のなかで言われている奴が一人で外出など…」

「何その異名!?」

この失礼な人はキリさん。イッタンさんと同期で、医療忍術と奇襲作戦を練るのが得

意な真面目君である。
「で？どうしたんだ？」
「どうしたって…何が？…うん」
「お前、この時間にはずっと家にいるだろ。どういう風の吹き回しだよ」
そこまで私が外にいることが珍しいのか？確かに、アカデミーが終わったらそそくさと用事が無い限り家に帰ってるけど…。
「ただ甘い物が食べたくなっただけだよ…うん」
また一口苺大福をほうばる。あと二口分しか無いや。
その光景を見てイッタンさんは
「…こりゃ明日はクナイが降るな」
「だな」
「降らねぇよ!!」
…何だかこの頃口が悪くなった気がするなぁ。

・・・

その頃黒ツチと赤ツチは

「なぁ赤ツチ、知ってるか？」
「なんだに？」
「今日デイ姉が　〝一人〟で外出したらしいぞ」
「……そんなバカな～」
「なんだ今の間は!?」
　平和だった。

旅行?どちらかというと大反対です

「お父さん、ちょっと言ってる意味が分かんない」
「だから、明日湯隠れに旅行に行くから準備しろって言ったんだ」
「…」
「…デイダラ?」
「……こんなの絶対おかしいよ…!」

どうしてうちの両親は毎回毎回大事なことを言うのが直前なんだ。デイちゃん理解できない。

アカデミー行って、黒ツチと赤ツチと一緒に「明日休みだね!」って駄弁って、ドロマ先生をからかって、放課後説教されて帰ってきたらいきなりお父さんから「旅行行くから準備しろ」とかどういうことだってばよ。

準備しろって言われても何持っていけばいいのか分かんないよ。某聖徳太子がアホの漫画みたいに袋には石とそこら辺の雑草でも詰め込んどけばいいのか?あ、ヤバイ頭がおかしくなってきた。何言ってるんだろう私。

とにかく唐突すぎるんだよ。

突然すぎて訳分かんないですよミサトさん。

ふと、お父さんの横で持っていく物を大きめのバッグに詰めているお母さんに目をやる。何だかお父さんよりウキウキしているように見える。

…もしかしてこれ、お母さんが提案したんですか?そうですよね?絶対そうですよね!?

試しに聞いてみる。

「え?…えぇそうよ!お父さんに提案したの!だって、この頃天使ちゃんが疲れているように見えたから…。駄目だった?」

いえ、何でもないです。何でもないですからそのうるうるした目をこっちに向けないで下さい。罪悪感が!罪悪感がああぁぁぁ!!

私の必死の抵抗（してない）も虚しく、しぶしぶ部屋に戻ってありったけの粘土をリュックに詰めた。

私がアカデミー四年生の時の出来事だった。

・・・

湯隠れの里。そこの大名は戦争が嫌で、今じゃ観光地と化した戦を忘れた国である。湯隠れと言うだけあって、温泉が至るところに沸いている。それに比例して宿もあちこちにある。逆に多すぎて萎える。

そして、そのなかで私達が泊まることになったとこなんだが、湯隠れの宿のなかでも接客が良いと噂の所らしい。お父さんが友達から聞いたんだと。お父さん友達いたんだね。

宿の受付を済ませ、意外と長い廊下を進む。中庭にある池が水鏡になっていて、空に浮いている雲を写し出して綺麗だ。あ、鯉がいる。そんな中庭を歩きながら見ていると、突然止まったお父さんにぼふっと当たってしまった。地味に鼻が痛い。

「なにやってるんだデイダラ。着いたぞ」

呆れたように言ってくるお父さんを、私は頬を膨らませながら睨む。お母さんは「あらあら」と言って頭を撫でてくる。やめろォ！髪がボサボサになる！…あれ、何故かデジャヴを感じる。

そんな光景をお父さんは一目してから扉を開け、部屋に入る。それに続いて私も入る。お母さんは最後だ。

「…なんと言うか、普通…だな。うん」

「普通が一番いいのよ天使ちゃん」

部屋の最初の感想がそれだった。普通の畳部屋で、真ん中には少し大きい机。テレビもあり、小さめの冷蔵庫を開くとコーヒー牛乳が数本あった。温泉行ったあとどうぞって事ですね分かります。サービス精神すごいなぁ。これがおもてなしってやつか。

「さてと、今は一時か…。先に風呂入るか」

「さんせーい」

「じゃあ、天使ちゃん行きましょうか」

やはり風呂なので自動的にお父さんとは別れる事になる。お母さんに手を引かれ、部屋を後にする。頑張れお父さん、ぼっちでも強く生きるのじゃ。

・・・

「テーテレッテーテッテテテ」

「…天使ちゃん、それ何処の歌?」

「ＪＡＰＡＮ」

そう発音よく言ったのだが、お母さんの頭上には予想通り?が三つくらいある。そりゃそうでしょうね。忍の世に日本無いですもんね。温泉の湯を手でぱしゃぱしゃしながらそう思う。

この世界に来てからもう１０年だ。もう前世の記憶なんてほとんど忘れてしまっている。ＮＡＲＵＴＯのストーリーも例外ではない。今じゃ何が起こるかなんて忘れてしまったが、キャラの名前やら能力等は辛うじて覚えている。これだけは忘れないようにメモったりしたのだ。ストーリーもメモっておこうと思ったが、時既に時間切れ。間違えた。時既に遅しであった。その時には原作の進み方なんて新しい記憶に上書きされていた。

「天使ちゃんどうしたの？ぼーっとして。もしかしてのぼせちゃった？」

「うぇ！？い…いや、何でもないよ。うん」

ビックリした。いつの間にやらぼーっとしていたようだ。危ない危ない。忍見習いとはいえこういうことはたまに命に関わる。と言うことをドロマ先生に教わったから気を付けなければ。

「ふぅー…お母さん、そろそろのぼせてきたぞ…うん」

「あら、やっぱり？それじゃ、あがりましょうか」

あとでコーヒー牛乳買ってあげるわね！と付け足すお母さん。いやいや、コーヒー牛乳部屋の冷蔵庫にありましたけど？もしかしなくても知らないな？

的な普通の会話をしつつ、家から持ってきた服に着替える。どんな服かはご想像にお任せする。

「そうだ！温泉玉子を買いましょ！」
「…何故に？」
「湯隠れと言えば温泉玉子なのよ天使ちゃん。また一つ知識が増えたわね！」
「うん！また一つ（何に使うか分からない）知識が増えたよ！」
手を繋いでさっきの宿へと歩みを進める。
前世の両親へ。
私はこっちでも楽しく生きてます。